

Title	『落窪の草子』の成立
Sub Title	The writing of Ochikubo no Soshi
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1985
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.47, (1985. 12) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00470001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00470001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『落窪の草子』の成立

石 川 透

はじめに

室町時代物語の一つである『落窪の草子』は、かつて、篠原悦夫氏が、

「小落窪」が「落窪物語」の継子物語の形式を相当にやはり「忠実に」踏襲してゐることは、右の筋書から明らかであらう。（『継子物語の歴史』『古典研究』昭和15年6月）

と述べられたように、平安朝に作られたとされる『落窪物語』をそのまま享受した作品である、とする見方が一般的である。しかし、これに対して、市古貞次氏が、

この作は、落窪といふ姫の名の由来と、継子物であるといふ事だけが、原作と一致してゐるのであって、「落窪物語」とは全然といつてもよいくらゐ、趣を異にしてゐるのである。（『中世小説の研究』昭和30年）

と述べられたように、『落窪物語』とは別趣向の物語である、とする意見も多い。この一見相反する両者の見解が、なぜ生じるのであろうか。このような疑問を抱きつつ、『落窪の草子』の成立に関わる問題について、考えてみようと思

う。

## 一、諸伝本

最初に、『落窪の草子』の諸伝本の所在状況をみてみよう。以下の伝本は、松本隆信氏「訂増室町時代物語類現存本簡  
目録」(『御伽草子の世界』昭和57年)をもとに、私に増補させていただいたものである。

A (一) 万治2年刊絵入大本二卷(慶応・国会二部・岩瀬・大阪中之島・河野信二) 《室物三・大成三・近世文芸叢書》

天理・奈良絵本 特大二冊

東大図・奈良絵本 半一帖

小野幸・奈良絵本上欠 半二帖

東北大狩野・宝曆3年写本 大一冊

(二) 〔元禄〕鱗形屋刊絵入半紙本二卷(大東急二部・東大尾欠) 《室物三解題》

(二) 小浜市立図・写本 半一冊

《新編御伽草子》

B 逸翁美(赤木旧)・奈良絵本 特大三冊 《室物三》

島原松平・写本 大一冊

麻生太賀吉・奈良絵本 半三帖

竜門・写本 大一冊

山岸文庫・写本 大一冊

西独国立・絵巻 大三軸 《西ベルリン本お伽草子絵巻集》

C 穂久邇・絵巻 大一軸 《大成三》

ここでは、諸伝本の書誌について述べる余裕がない。このうち、松本氏前掲書所載分については、同氏による「擬古物語系統の室町時代物語(統)」(『斯道文庫論集』5・昭和42年)や、翻刻のある《》印の伝本はその該当書を参照していただきたい。また、これらの諸伝本とは別に、現存場所不明であるが、存在が確認できるものとして、

1 『国書総目録』「落窪物語」所載「鈴鹿(天保一一伴信友写)」

2 『思文閣古書資料目録』79(昭和47年)所載「落窪のさうし・二冊(延宝頃筆写、土佐風極彩精描10図入)」

3 『思文閣古書資料目録』92(昭和50年)所載「六角堂観音縁起絵巻・一軸(江戸初期筆写、金泥極彩精緻絵詞巻)」

4 『古典籍下見展観大入礼會目録』(昭和57年)所載「おちくぼ・三冊(寛文頃写、大型奈良絵本)」

5 『弘文荘待賈古書目』33(昭和34年)所載「小落窪絵巻・三軸(伝土佐光起筆、承応寛文頃写)」

があげられる。1は、伴信友書写であるから、伴信友文庫の一本である小浜市立図本と関係があるかもしれない。2は、その写真掲載箇所の内容からして、A類本に近いが、本文に多少出入りがある。3は、題名は変っているが、写真掲載箇所の内容からして、C類本に近い『落窪の草子』であることがわかる。4・5は、B類本である。なお、5は、『宮内庁書陵部・和漢図書分類目録・増加一』(昭和43年)所載で、現在閲覧停止中の「おちくぼ物語絵巻・三軸(伝土佐光起筆、彩色)」と同一本であるかもしれない。

さらに、これらの『落窪の草子』とは別に、以下の伝本を確認しえた。

A 実践女子大学図書館常磐松文庫蔵 「おちくほ巻之上・中・下」・奈良絵本 特大三冊

B アイルランド・チェスター・ビーティ図書館蔵 「四季さうし夏之上・中」・奈良絵本 半二帖

C 実践女子大学図書館常磐松文庫蔵 「おちくほ秋上」・奈良絵本 特大一冊

D 市古貞次氏蔵 「佚名物語」・奈良絵本挿絵欠 特大三冊

この四伝本は、いずれも完本ではなく、四つを合わせて一つの作品の一部を構成するものである。この作品も、本来は「おちくほ」と称する物語であつたと思われ、文体・内容からみて室町時代物語の一つとすべきであるが、前に掲げた『落窪の草子』とは、量的・内容的に著しく異なっているので、あえて別本とする。この別本『落窪の草子』は、現在、以上の四伝本八冊分が確認できたが、巻の立て方から、本来は春夏秋冬三冊ずつ計十二冊の物語であつたと思われ、全冊揃えば、分量的に『秋月物語』等に匹敵する、室町時代物語では最長編クラスの作品であつたと考えられる。このように、伝本の現存状況を含めて興味深い作品であるが、ここでは本題から離れるので資料の提示のみにとどめ、詳細は別稿に譲りたい。

## 二、成立時期

さて、以上のように多くの伝本をもつ『落窪の草子』は、いつ頃成立したのであるうか、その奥書・刊記類から推測してみよう。『落窪の草子』には、その成立時期をうかがわせる注目すべき伝本が存在する。それはB類に属する山岸文庫本で、その奥書は以下のように非常に長いものである。

a 此本上中下総三卷者文安五年秋請戸部尚書之許而写之畢紛拏之際倉率録之故今復新浄書貽之于後昆云

維時宝徳三年南呂毅旦

左衛門大夫源持資 在判

b 這個三卷去夏入洛之日訪正議大夫卜氏／於神樂岡望遠亭偶爾覽之乞借騰写(44才)之城南東福禪刹安樂寓南窓之下云

寛正改元之年十有二月

滄洲頭陀明琳 在判

c 斯書廉蔵主之秘蔵也夫先師之手澤／存于今予亦有同学之因暇日於相国鈔／寿精舍録旃再加校訂

文亀第二龍集竊蝕不見月佛生日 釋浩海

d 一日到東矯指月庵庵主案上有斯書(44ウ)之在兵革回祿數回書卷散区存于今者／殆希仍乞写之了安勿出於梱外

丁卯孟冬念三 通議大夫卜部宿禰 在判

e 享祿二年四月八日就菅二品拝借 殿下／之御本書写翌日夕付二品返上畢件／之御本者乃神祇管領卜氏之珍藏也

正二位行權大納言兼右近衛大将藤原

二合(45才)

f 天文十二年癸卯正月吉日於吉水大／乘院写了

舜阿 在判

g 弘治乙卯陽月之吉

大外記左大夫中原 在判

h 頃日聞得沙彌於知久保乃草子藏之文／庫往披閱之即大外記師虫喰脱也莫虫喰

天正二年甲戌二月虫喰 戸部虫喰藤字本存餘不見可惜 (45ウ)

i 文祿四年歲次乙未睦虫喰

從三虫喰侍從虫喰雅虫喰 (46才) (46ウ)

j 於地久保草紙 一冊

從粟田口信豊君借覽而令書写者也

昭和十年十一月中浣 岸廻舎識之

川角子十一月三日起毫余行于閑無／同月十一日余受之聊記来由云云(47才)

このような長い奥書をもつ伝本は、『落窪の草子』の他の伝本はもちろん、室町時代物語全体を見渡しても、きわめて異例なものである。そこで、この奥書について少し検討してみたい。山岸文庫本は、一番最後のjにみられるように、山岸徳平氏が粟田口信豊氏の所蔵本を昭和十年に写させたものである。山岸氏は多くの伝本を模写して残されているが、この本もそうした模写本の一冊と思われる。その親本である粟田口氏の伝本に、aからiまでの奥書が付いていることになる。しかし、粟田口(現姓、芝山)信豊氏によれば、その親本にあたる伝本を借与されたことはない、ということであるから、あるいは別の人物と間違われたのかもしれない。とにかく、aからiまでの奥書をもった伝本が存在していたことは確かであろう。

これによると、aに記す文安五(一四四八)年には『落窪の草子』が成立していたことになるが、aの奥書を書いたとされる「源持資」は、太田道灌のことである。太田道灌については言及するまでもないが、後世、道灌を主人公とした

多くの話が作られたことや、この時点ではまだ「左衛門大夫」になっていないことを考えれば、この奥書も道灌に仮託されて作られたものとすべきであろう。また、bに登場する「正議大夫卜氏」とは、学者として著名な卜部兼俱を指すものと思われ、この辺からも、著名人に仮託した姿がよく表われていると思う。さらに、bを記した「明琳」とは『洞上燈錄』にみられる宗哲を指すと思われる、そうすると、曹洞宗の僧侶であることになる。c以下の登場人物も、それに相当する実在の人物が見出せるが、それらについての検討は省略する。全体を通してみると、禪宗系の僧侶、あるいは卜部氏が多く登場することから、彼らに關係する人物によって、この奥書が創作され、『落窪の草子』に付加されたものとすべきであろう。ただし、aからiまでの全体が偽作なのか、途中までが偽作なのかは判別しがたい。この山岸文庫本を見る限り、fで書体を変えたり、cやh iのように虫食を表示するなど、多くの問題が含まれている。いずれにしても、aにみられる文安五年をもって、その成立時期を考えることは不適当であることになる。

『落窪の草子』の他の伝本には、一部分でもこの奥書と一致する奥書をもつものは一本も存在しない、ということもこの奥書が偽であることを裏付けると思う。ちなみに、他の伝本の奥書・刊記類で一番古いものは、A類本(一)の万治二年刊本である。とすると、正確には万治二(一六五九)年以前が成立時期であるとすることができる。奥書のない写本、例えば龍門文庫本のように、これより成立時期がさかのぼれるものもあるが、正確な年代は不明である。また、『落窪の草子』の内容から成立年代を特定することができないため、『落窪の草子』の成立時期は未詳とせざるをえない。伝本の書写年代から近世初期には成立していた、ということとどめたい。

### 三、概略

『落窪の草子』がどのような要素で成り立っているかを考える前に、本書の概略を記しておこう。これは、A類本(一)系統をもとにしたもので、便宜上(1)から(9)までに分けてみた。

(1) 沢野の中納言の北の方は、六角堂の観音に子供を授けてと祈願し、光るほどの姫君が生まれる。

(2) 姫君が七歳の時に北の方は亡くなり、やがて、継母が入り娘二人と息子一人が生まれる。

(3) 姫君は継母に虐待され、板敷を一段下げた所に住まわされ、落窪の姫君と呼ばれる。

(4) 姫君の美しさは関白の子二位の中將の耳に入り、中將は文を送り、姫君もこれに答える。

(5) 継母はこの交渉を妬んで中納言に讒言し、中納言は姫君を六角堂に参詣させる。その留守に中將の使者が文を届けてきたが、継母が、姫君は人に盗まれたとうそを言ったので、中將は気が狂い、行方不明になる。

(6) 一方姫君は、観音に祈願していると、下向する道で最初に会った人を自分の夫にせよ、という示現を得る。そして最初に会ったのは、この頃御堂に住んでいた物狂いであったが、この物狂いも示現を受けていたので、やむをえずこれと契り一緒に暮す。

(7) やがて、物狂いは中納言との見参を求め、中納言が仕方なく窺見参を行うと、物狂いは行方不明の中將であった。

(8) 中將と姫君は関白の家に迎えられ、中將は大納言となり、父関白から世を譲られ、中納言をも大納言にし、姫君を北の方として栄える。

(9) これは、ひとえに六角堂観音の利生によるものである。

A 類本(一)系統の中でも(ロ)の鱗形屋刊本は、女主人公の名を「なにはのまへ」としているが本文はほとんど同じである。A(二)系統本は、概略の(7)の途中までは(一)系統と同一本文であるが、それ以下は異なる。

また、B 類本は、本文・内容ともにA 類本と大きく異なる。特に、冒頭にA 類本にはみられない六角堂の縁起がある。その部分を(0)として、その概略を示すと以下のようになる。

(0)ある時、聖徳太子は難波の浦で金銅の如意輪観音を得て、示現により山城国愛宕郡に六角堂を建立して安置した。後に示現の通りに平安京に遷都され、京造営に当って条々を割った時に、六角堂が小路のまん中にあり、その処置に困っていたところ、一夜のうちに御堂が自ら動いた。

B 類本には、この六角堂の縁起が加わり、また、A 類本のうち、中将と姫君の恋愛談である(4)(5)の部分が省略されている。したがって、B 類本はA 類本よりも六角堂の利生が強調されていることになる。

C 類本は、概略(0)が存在し、概略(4)(5)が存在しないことなど、B 類本に近いが、本文的には、A B 類本を合わせたような特徴をもつ。

本来ならここで、A B C 各類本の詳細な相異や、各類本内での諸伝本の特徴等を記すべきであるが、紙幅に余裕がない。よって、以上の概略、並びに略解説で先に進むことにする。

#### 四、『落窪物語』との関係

それでは、このような概略の『落窪の草子』が、内容的にどのような要素で成り立っているか、具体的にみていくこ

とにしよう。最初に、『落窪物語』との関係について考えてみたい。

第一に、両本の諸伝本に記された書名を掲出すると以下のようになる。なお、『落窪の草子』は各類に分け、平仮名は漢字に直した。

落窪物語	落窪・落窪物語・落窪の草子
A (一)類本	落窪・落窪物語・落窪の草子・難波の前物語
A (二)類本	落窪物語略本・小落窪
B類本	落窪・落窪の草子
C類本	落窪・六角堂観音縁起絵巻

このように、『落窪物語』と『落窪の草子』は、その書名だけからでは区別がつかない。両本とも古い伝本の主流は「落窪」という書名であり、平安朝『落窪物語』には「落窪物語」という書名が、室町時代物語『落窪の草子』には「落窪の草子」という書名が、いくつか存在したことから、今日では両者の書名の区別が行われたのであろう。平安朝『落窪物語』のうち、「落窪の草子」の書名をもつものは三手文庫本である。この他、天理図書館に目録題を『落窪物語抄』とする伝本が存在し、内題に「おちくほのさうし」とある。本書は、『落窪物語』の和歌を中心とした抄出本であり、分量的に室町時代物語『落窪の草子』に近い面がある。また、『落窪の草子』のうち、「落窪物語」の書名をもつものは万治二年刊本である。これらの書名に関わる問題は、別本『落窪の草子』を含めて、それぞれ興味深いが、ここでは、両者の書名が非常に近く、混乱されるほどの要素をもっていたことを示しておきたい。

この書名の共通は、『落窪の草子』が、『落窪物語』の内容を取り入れたことに起因するであろうが、やはり平安朝と室町期の両方の物語が存在する『狭衣』をも含めて、当時の書名に対する意識や、異本の作成についての態度を深く解

明する必要があるであろう。いずれにしても、『落窪の草子』に「小落窪」や「六角堂観音縁起絵巻」という題名が存在することは、『落窪の草子』の性格を端的に示してはいるが、後出来のものとすべきであろう。

次に、登場人物をみてみると、『落窪の草子』の登場人物は十人程度であるが、そのほとんどを『落窪物語』の登場人物と重ね合わせることができる。そして、個別の登場人物名も一致する場合が多い。以下に掲げたのは、男主人公である中將と、姫君の父中納言が、昇官していく様子を系統別に列挙したものである。

二位中將

落窪物語	右近少將・左近少將・三位中將・中納言兼右衛門督・大納言兼左大將・左大臣・太政大臣
A (一)類本	二位中將・大納言・閑白
A (二)類本	二位中將・閑白・太政大臣
B類本	二位中將・閑白
C類本	二位中將・閑白・内大臣

中納言

落窪物語	中納言・大納言
A (一)類本	中納言・大納言
A (二)類本	中納言・大臣
B類本	中納言
C類本	中納言

『落窪物語』は、分量にして『落窪の草子』の約十倍あるから、官職が次々と変ってゆくが、この表だけからでも、『落

窪物語』と『落窪の草子』の近似、中でもA(一)類本との近似が指摘できよう。

書名・登場人物名の他に『落窪物語』と一致するものに和歌がある。以下に掲げるのはA類本に登場する和歌である。

a すゑかものまたいてたゝぬをふりすてゝいかになりゆくわか身なるらん

b 目にそへてうさのみまさる世の中にこゝろつくしの身をいかにせん

c きみありときくに心をつくはねのみねとこひしきなけきをそする

d ほに出ていふかひあらは花すゝきそよともかせにうちなひかまし

このうち、b c dは『落窪物語』にほぼ同一の和歌を見出すことができる。『落窪の草子』の概略(3)(4)にこの三首は存在し、b cは、作者もその使われ方もほぼ同様であるが、dは少し違っている。まず和歌自体が、『落窪物語』の結句は

うちなひかなん

となつている。「なん」であれば、他に対して実現を望む気持を表わし、「まし」であれば、自分の希望を表わすことになる。事実、歌の作者は、『落窪物語』では主人公であり、A類本では姫君になっていて、歌の役割としては、姫君がなびくという点で一致している。これらの状況から考えて、A類本の作者が、『落窪物語』のこの歌をみて、都合のいのように手直ししたのかもしれない。

また、aの和歌は、『落窪物語』には見出せないが、これは明らかに

鈴鹿山憂世をよそにふりすてていかになり行わが身なるらん

という西行の『山家集』にある歌に影響を受けたものである。この歌は、『新古今和歌集』卷十七や、諸本ある『西行物語』の一部にもみられ、当時有名な歌だったのである。『こほろぎ物語』にも類歌がみられる。このように、室町時代物語では、有名な和歌を勝手に作り変え、物語に入れてしまうことがしばしばある。しかし、b c dのような『落窪物語』の和歌が、さして有名だったとは思われず、この場合は、『落窪の草子』の作者が、直接『落窪物語』をみて和歌を取り込んだ、と考えるべきであろう。

B C類本にはこれらの歌がなく、全く別な和歌数首があることから、和歌の面からも、A類本は『落窪物語』と近似していることが指摘できよう。

さて、肝心の内容について比較してみると、概略(3)から(5)の途中までは、『落窪物語』に対応する箇所が見出せる。以下に掲げるのは、概略(3)にある、継母が姫君を落窪に住まわせる場面であり、『落窪物語』では物語の冒頭にあたる。本文の比較ができるように、諸本の該当箇所を列挙してみよう。

落窪物語(寛政六年刊本『日本古典文学大系』)

寢殿しんでんの放出はなちいでの、又また一間ひとまなる所の、落窪おろくぼなる所の、二間ふたまなるにすなん住まませ給たまひける。君達きみたちともいはず、御方(おんかた)とはませ給たまふべくもあらず。名なをつけんとすれば、さすがに、おとどのおぼす心あるべしとつつみ給たまひて、「落窪おろくぼの君きみといへ」との給たまへば、人々ひとびともさいふ。

A類本(万治二年刊本『大成三』)

たつみのかたに、ひとまなるところの、有けるを、いたしきを、一たんさけて、そこにすませ給ふほとに、人みな、おちくほのひめきみとぞ、申ける

B 類本(赤木旧本『室物三』)

たつみのすみに、おちいたしきをこしらへて、すませ給ふ、まゝは、の心の、さかなさよ、おちくほのひめきみとそ、なつけゝる

C 類本(穂久邇本『大成三』)

たつみのすみに、おちいたしきを、ひとまこしらへ、すへをきて、おちくほの姫君とぞ申ける

このように、『落窪の草子』は、『落窪物語』を簡略化し、筋本位に展開していることがわかる。同時に、この例から、C 類本が A B 両類本を合わせたような本文をもっていることも明らかであろう。また、A 類本には「ひとまなるところの」という『落窪物語』に使用されている語句が用いられており、本文上もやはり、A 類本が『落窪物語』に近いとすることができよう。このような『落窪物語』と A 類本の対応は、概略(3)から(5)までにわたってみることができる。ただし、「一間なる所の」という語句をもつ『落窪物語』の伝本はあまり多くない。この辺から、『落窪の草子』が依拠した『落窪物語』の伝本を明らかにしうるかもしれないが、種々の問題を含んでいる。

また、概略(8)にみられる一族繁栄の姿は、『落窪物語』巻四と対応しており、その官職の進み方は、前にみた通りである。そのうち、姫君の父中納言が大納言に昇進する場面を例に掲げると、以下のようになる。

落窪物語

「何かはさは思はんを。早うさるべき様に奏を奉らせよ。大納言はなくてもあしくもあらじ」と、わが心なる世なればとおぼしての給へば、限りなく喜び給ひて、申(し)たまひて、奏奉らせ給ひて、中納言、大納言に成(り)給(ふ)宣旨(せんじ)くだし給ひつ。

## A類本

大なこんとの、くらひにつかせ給ひて、中なこんをも、大なこんになし給ふ

『落窪物語』のこの部分は、これ以前に、男主人公が自分の職である大納言を譲ろうと決心する場面があり、A類本の掲出部分に対応する箇所は、はるかに長い。しかし、A類本も、中納言の大納言昇進に男主人公が絡んでいる点で共通している。この辺もA類本の筋の簡略化の一例といえるであろう。

以上のように、A類本の概略(3)(4)(5)と(8)は、『落窪物語』の影響を色濃く残した部分とすることができよう。BC類本には、概略(4)(5)が存在せず、(8)はあるにしても、前掲のような中納言が大納言に榮進する場面はないから、A類本ほど『落窪物語』の影響を受けているとはいえない。また、『落窪物語』の影響といっても、A類本と対応するのは、その冒頭と巻末という、『落窪物語』全体からすれば、ほんのわずかな部分である。したがって、『落窪物語』にみられるような、継母に対する数々の復讐や、それに続く親に対する孝養はほとんどなく、『落窪の草子』は『落窪物語』の冒頭と巻末のみ読めば作れる作品である、ということができよう。しかし、『落窪物語』の『落窪の草子』への影響、特にA(一)(イ)系統本への影響は、以上のことから明らかであろう。

## 五、六角堂との関係

それでは、このような『落窪物語』の影響以外に、どのような要素が『落窪の草子』にみられるであろうか。A類本の概略をみてわかるように、『落窪物語』の影響を受けていない概略(1)(2)(6)(7)(9)には、六角堂が多く登場している。すなわち、姫君自身が六角堂観音の申し子であり、中將と巡り合い、一族繁栄をもたらすのも、六角堂の利生によつてい

るのである。この六角堂ということを除けば、概略(1)(2)や(9)などは、室町時代物語によくみられる類型的な話であるが、これがなぜ六角堂と結び付くのか、あるいは、概略(6)のような、人と人とを結び付ける示現がなぜでてくるのか、ここでしばらく、六角堂に関係する物語・説話類をみていきたいと思います。

六角堂は、現在も京都市の中央に位置し、華道の池坊発祥の地として有名な寺院である。『落窪の草子』BC類本には、概略(0)のように、六角堂の縁起が存在する。この話は、古くは野村八良氏『室町時代小説論』(昭和13年)に指摘されているように、「六角堂縁起」をもとに作られたと思われる。「六角堂縁起」は、『伊呂波字類抄』や『続古事談』等に掲載されているから、院政期から鎌倉時代には成立していたろう。また、中世に多くの説話類を包含していった『聖徳太子伝記』のうち、叡山文庫本・国会図書館本等にも「六角堂縁起」があるが、内容的には離れる。やはり、『落窪の草子』の六角堂の縁起は、『伊呂波字類抄』系統のものをもとにしたとすべきであろう。それでは、この概略(0)以外の六角堂の話は、何か典拠があるのだろうか。

六角堂を考える上で、宗教上最も重要なのは、親鸞である。その伝記『善信聖人絵』(『新修日本絵巻物全集』)の詞書に、

建仁三年みずのとし癸亥みづのとし四月五日夜寅時、聖人夢想告ましくみづのとしき。彼記云、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して白衲の袈裟を着服せしめ、廣大の白蓮華に端座して善信に告命してのたまわく、行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極楽、文、救世菩薩善信に言、此是我誓願なり。

とある。これは、六角堂観音によって、親鸞が妻帯する示現を受けたことを示すものであり、それが、『惠信尼消息』等によれば、六角堂に百日参籠中の親鸞の夢の中で行われた、というのである。ここで思い起されるのが『落窪の草子』の

概略(6)における、六角堂参籠と結婚の示現である。両者は、六角堂参籠中の出来事であること(B類本は百日参籠中であることまで一致)、夢の中で六角堂観音による結婚の示現を受けることなど、あまりにも似通っている。親鸞は浄土真宗の開祖であり、室町期には蓮如によって真宗が再興されていたことを考えれば、この親鸞による六角堂の話は、室町時代にはかなり広まっていたらう。その有名な話を利用して『落窪の草子』が成立したことは十分考えられる。

しかし、これ以前の文献にも、六角堂における夢告を扱ったものが存在する。それは、『今昔物語集』巻第十六「隱形男、依六角堂観音助頭身語第卅二」という説話である。これは、

昔、いつも六角堂に参詣する年若い侍が、ある日、鬼により隱形の身とされるが、夢告に従うことによって、結局姿を現わすことができた。

という内容である。この話には、次のような文章がある。

此<sup>カク</sup>テ二七日許<sup>バカリ</sup>ニモ成<sup>ナリ</sup>ヌルニ、夜<sup>ヨ</sup>ル寝<sup>ネ</sup>タルニ、曉<sup>ホト</sup>方<sup>ケ</sup>ノ夢<sup>ユメ</sup>ニ「御帳<sup>ミチヤウ</sup>ノ辺<sup>ヘ</sup>リ、貴<sup>キ</sup>氣<sup>キ</sup>ナル僧<sup>ソウ</sup>出<sup>イデ</sup>テ、男<sup>オトコ</sup>ノ傍<sup>カタ</sup>ニ立<sup>タチ</sup>テ、告<sup>ツゲ</sup>テ宣<sup>ノタマ</sup>ハク、「汝<sup>ニ</sup>ヂ、速<sup>ハヤ</sup>ニ、朝<sup>アサ</sup>、此<sup>ココ</sup>ヨリ罷<sup>マカリ</sup>出<sup>イデ</sup>ムニ、初<sup>ハジメ</sup>テ会<sup>ア</sup>ラム者<sup>モノ</sup>云<sup>イフ</sup>ハム事<sup>コト</sup>ニ可<sup>シ</sup>随<sup>ツ</sup>シ」ト」。此<sup>カ</sup>ク見<sup>ミ</sup>ル程<sup>ハジメ</sup>ニ、夢<sup>ユメ</sup>覚<sup>サメ</sup>ヌ。(『日本古典文学大系』)

このように、六角堂の観音によって、朝最初に会った人物に従え、と夢告を得る、ということが明記されている。そして最後は、六角堂の利生譚ということで締めくくっているのである。そうすると、これは『落窪の草子』の概略(6)にある、

いまははや、とくくげかうせよ、これより、げかうせんみちにて、はしめにあはん人を、なんちかつまと、するならば、すゑは、めてたかるへしと、のたまふとおほへて、ゆめさめぬ(万治二年刊本)

という話と、きわめて近いものということができる。『落窪の草子』が成立するはるか以前に、六角堂の利生譚として、下向して一番最初に会った人に従え、という示現の話が存在したことがわかる。しかし、『今昔物語集』の伝本自体が、中世から近世にかけてさほど流布したとは思えないし、六角堂であることを除けば、この類型の話は『古今著聞集』巻五・『三國因縁地藏菩薩靈驗記』巻第八・『ささやき竹』・昔話『牛の稼入』等、非常に多くの説話集、物語に指摘できる。したがって、『落窪の草子』の作者が、直接『今昔物語集』をみたというよりは、この類型の話を六角堂に結び付けて利用したか、あるいは、すでに六角堂と結び付いていたこのような話を利用した、とすべきであろう。

以上は『落窪の草子』成立以前の六角堂の扱われ方であるが、同時代あるいは伝本が多く残されている近世前期の文芸作品ではどうかであろうか。前出した別本『落窪の草子』は、六角堂が登場することなど、『落窪の草子』と似た面があるが、そこでは、

この人、日ころおもひ給へる女はうを、いさゝかの事ありて、女房うちうらみうせ給ふを、ほいなくおほして、此ゆくゑをしらまほしくねかひ給ふて、まい日まうて給ひける(市古貞次氏蔵『佚名物語』)

とあるように、六角堂に人と人との再会を祈願する場面があり、これを見て、女主人公も中将との再会を願っている。結末部分の伝本は未確認であるが、おそらく、両者の邂逅ということになると思われる。この別本『落窪の草子』は、『落窪の草子』の影響を受けて成立した可能性が高いが、そうであっても、姫君が六角堂の申し子であるということと並んで、この邂逅譚を残しているところに、六角堂の利益の特色がでてみるとみるべきであろう。

また、寛文から延宝年間に出版されたとみられる古浄瑠璃『六角堂救世菩薩』(彰考館蔵)も、六角堂を考える上で重要な作品である。本書は、

の刊記をもち、内容は、やはり六角堂観音の利生を多く説き、全五段中第二段には、古浄瑠璃らしく戦闘の場合がみられる。『落窪の草子』との関係で、特に重要なのは第一段で、

しかれども、いかなるしゆくごうにや、御子さらにましまさねば、ふうふ、あけくれ仏神にきせいある、中にも都にかくれなき、六かくだうのくせぼさつ、れいけんたつときくわんぜおんに、三七日まふで給ふ

とあるように、後鳥羽院の御宇、月丸太政大臣夫婦が六角堂に申し子を祈願する。しかし、観音は婦人の腹に子を授けることはせず、五歳になる女子を与えると夢告し、その通りになる。その五歳の子供自身が、六角堂観音によって別の女に生まれされた子供なのであった。ということとは、六角堂観音の申し子という点でも、人と人との邂逅という点でも『落窪の草子』と共通していることになる。この場合、子供が六角堂において授受されるのは、井原西鶴『諸艶大鑑』の冒頭にある、六角堂の門前で捨子を拾う話とも近似性が指摘できるであろう。

この他、近世初期から中期にかけてその内容が成立したと思われる、伊達本の謡曲『六角堂』（『未刊謡曲集』31）は、詞章のみ伝わる作品であるが、それは、

六角堂観音の開帳の時に、筑紫箱崎の夫に死別し、一子菊若丸に生き別れた狂女が、観音の利生によって菊若丸に再会する

という内容である。本作品は明らかに、謡曲『隅田川』『栢崎』『百万』等の影響を受けているが、骨子は六角堂の利生譚である。さらに、こちらは女性の物狂いであるが、やはり狂人が登場し、また、夫婦の出会いではないが、やはり人と人との出会いを描いている。そういう意味では、『落窪の草子』に発想的に近いものがある、といえるであろう。この

謡曲『六角堂』を含む、伊達本番外謡曲五百六番は、

素材が巷説や田舎の無名に近い神社仏閣などの縁起といった民間伝承的なものによつた所が多（「伊達本番外謡曲解題」『未刊謡曲集』31）

いという特色をもつから、あるいはこの曲も六角堂周辺の民間伝承がもとになったかもしれない。

このように六角堂をみてくると、『落窪の草子』が盛んに写される頃まで、近世前期までの、文学における六角堂の姿は、おのずとはつきりしてくる。すなわち、六角堂といえば、申し子や、人と人との邂逅の願いをかなえてくれる観音である、ということだ。むろん、これは六角堂に限らず、清水寺や長谷寺も同様な願いをかなえてくれる観音として有名である。しかし、当時は六角堂も大きな存在であつたが、清水寺や長谷寺はさらに大きく、知名度も高かつたので、その効験はこればかりではなく、多種多様になつてゐる。それは多くの説話集・物語が説く通りである。その点、六角堂が文芸作品に登場する機会は多くなく、しかもさほど流布したとは思えない作品に残つてゐるにすぎない。したがつて、これだけの例から六角堂を性格付けようというのは無理があるのだが、ある程度はこのような性格がいえると思ふ。おそらくは、六角堂といえは、申し子や、人と人との邂逅をかなえてくれる観音だということが、当時の人々に語り継がれ、信仰されていたのであらう。さらには、それを説話のようにして伝承した人々がいたのではないだろうか。あるいは、六角堂の僧自身が、説教の材料として、六角堂の靈験あらたかさを説くために、こういった話を使つていたのかもしれない。これまでみてきた六角堂の文芸作品のほとんどが『落窪の草子』と共通点をもつのは、このような六角堂説話とでも称すべき伝承があり、それをもとに書かれたためではないか、と想像したい。したがつて、『落窪の草子』の六角堂に関する話は、作者の独自の創作というようなものではなく、六角堂の周辺にあつた話を取り入れて作り

上げられたもの、とすべきであろう。

なお、六角堂に関わる話として、『住吉物語』の六角堂の別当法師のことや、『昨日や今日の物語』上巻第七段の話についても触れたいが、その余裕がない。また、六角堂は多くの日記・地誌等にも散見するが、それらについては、田中教忠氏『六角堂如意輪観世音考』（昭和8年）、名畑崇氏「六角堂考」（『大谷史学』10・昭和38年）等を参照していただきたい。

## 六、同時代物語との関係

『落窪の草子』における『落窪物語』と六角堂との関係についてみてきたが、これ以外にも『落窪の草子』の成立に関わる重要な要素が存在すると思われる。ここでは同時代の物語類との関係を考えてみたい。

『落窪の草子』を継子物と呼ばれる一連の小説群の中に位置付け、その類似性を指摘することは、すでに市古貞次氏が『中世小説の研究』においてなされている。よって、継子物との関係については、市古氏の御著書を参照していただくことにし、ここでは、継子物ではないが、室町時代物語の中で一つだけ、『落窪の草子』と近似関係にある作品を指摘しておきたい。それは、『文正草子』で、庶民栄達の物語として、室町時代物語の中では最も流布した作品である。特に江戸時代になると渋川版御伽文庫二十三編の冒頭を飾り、正月には「読み初め」に利用されている。といって、室町時代においてもそう有名だったかは確たるものがない。以下、『文正草子』と『落窪の草子』の類似点を列挙してみよう。

①二位の中將、父関白を始めとする登場人物、及びその名前。

② 姫君は申し子。

ここまででは、他の継子物とも共通するのであるが、この外にも、

③ 中将が都から消え去ってからの邸内の騒ぎや、北の方の歎き。

④ 鹿島大宮司が中将と面会する場面と、『落窪の草子』の中納言が中将と面会する場面。

⑤ 中将が姫君を連れて都へ上る時、人々が供に集まる場面。

⑥ 帝が登場する。

⑦ 姫君の父は大納言まで栄進する。

等があげられる。さらに、これは『てごぐま物語』等にもある類型的なところなので強調はできないが、それぞれの終る直前で、

文正草子（赤木文庫旧蔵横形奈良絵本『大成十二』）

くわんはく殿まんところも、くにくをなひかし、たかきところに、たうをたて、ひきく所には、（御たうを）たうをたて、  
大かいに、ふねをうかめ、こかわに、はしをかけ、さまくの、ぜんじ、ぜんごんを、御心に入給ふ

落窪の草子（万治二年刊本）

大なこんは、ばんみんなのためにとて、たかきところにたうをたて、ひくきところは、やまをつき、大がには、ふねをうかへ、こがには、はしをかけて、じひを、もつはらとして、しゆしやうのために、よきことをのみ、たくみ給ふ

という近似した本文が存在する。この部分は、『文正草子』では、掲出本の他に、国会図書館蔵本、御伽文庫本等の系統

にみられ、『落窪の草子』の方は、A(一)類本のみみられる。これは類型句であるから、考えに入れるべきではない、とするにしても、前に掲げたように、全体の骨格に関わる部分において似た構想をもっている点から、どちらかの成立に一方が影響を与えたと考えるべきだと思う。『文正草子』の成立時期については多くの議論がなされているが、どれも確定するまでには至っていない。現在残る写本には室町末期と思われるものがあるから、伝本上は『落窪の草子』より古いといえよう。だからといって、『落窪の草子』が『文正草子』の影響を受けて成立したとは断言できないが、構想的に『文正草子』を取り入れたことは十分に考えられると思う。

### むすび

最後に、『落窪の草子』内での、ABC三つの系統の成立順序と作者について触れておきたい。これまでみてきたように、A類本は、『落窪物語』の影響が最も強く、『文正草子』にも近い面をもっている。B類本は、六角堂の利生が強調されている。C類本は、B類本に近いが、A類本と似た箇所もあり、全体的に簡略になっている。このC類本は、AB両類本の特徴をもっていることから、両類本より後のものだと思われるが、AB両類本の先後関係はなかなか判断がつかない。『落窪物語』や『文正草子』に近い面を残していることから、A類本の方が先にでき、それに六角堂の縁起を加え改作したのがB類本である、とするのがよいと思われるが、その逆もありえなくはない、といったところである。作者は、他の室町時代物語と同様に明らかではないが、六角堂の利生が多く説かれていることから、六角堂関係の人間であるかもしれない。

このように『落窪の草子』をみてくると、最初にあげた、篠原氏と市古氏との見解の相違の理由は、おのずから明ら

かであろう。篠原氏は『落窪物語』の影響の濃い部分に注目され、市古氏は、六角堂の話の方に注目されたことによる相違であって、『落窪の草子』は、この両面をそなえた作品である、ということができよう。

以上をまとめてみると、『落窪の草子』は、『落窪物語』に直接的な影響を受けながらも、六角堂の利生譚として、当時の説話・物語類を組み込んで成立した作品であり、その構想には『文正草子』の影響を受けた可能性がある、ということができるとであろう。

〔付記〕 本稿は、卒業論文、修士論文の一部によった、第三五九回国文学研究会（昭和六〇年六月一五日）の発表をもとにしたものである。各途次において御教示を賜わった諸先生方、並びに、貴重書の閲覧を許可された各図書館・諸先生に厚く御礼申しあげたい。